
夏祭り

潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏祭り

【Nコード】

N0546N

【作者名】

潤

【あらすじ】

とある暑い夏の日。

藤原大樹は友人の山本鉄平に祭りに行こうと誘われる。

そしてその祭りの日に

山本とその彼女木谷胡桃の間に問題が発生する。

今は夏真っ盛り。

そして藤原らは今高2である。

今日はこの学校の1学期の終業式である。

といっても1週間も休めば

すぐに学校で夏期講習という名の

授業が待っている。

「はあー」

藤原は溜息をついた。

「おい、大樹。」

終業式に溜息なんてどした？」

「あー鉄平か。」

いや、俺学校選び

間違えた気がする」

「なんでや？」

「だってよ、夏休みが

この後の1週間とお盆だけだぜ」

「まーせやけど、そーいうなや。」

せやせや、んなことよりも

水曜にある夏祭り行こうぜ」

「今年も男だらけでか？」

どうせなら女でもいたらなあ…」

「え、ウチも友達と行くけど？」

山本の彼女の木谷が口をはさんだ。

「あー鉄平の彼女の木谷さんか。」

おい、鉄平、木谷さんとはどこまでいったんや？」

「え、どこまでって手つないでデートまでしか…。」

悲しくなるから聞くなあー」

「あー木谷さんの友達もくるのか。
んじゃ、今年も行くか」

水曜日。

藤原は山本と田中とで

祭りの女子組との待ち合わせ場所に

田中の意見で30分前にいた。

「で、鉄平。

木谷さんとは今日どこまで

いきたいんや？」

「お前それ好きやなあ。

まー雰囲気任して

ムハハ的なことできたらいいなあー

っと思ってんねんけど

現実は無理だろうなあ…。

せめてキスくらいはしたいなあー」

「そっかー。

まーいいよな。

彼女持ちは」

「だろ？

なんか胡桃の友達の

鈴木さんだったけか？

結構可愛らしいぞ」

「そうかいな」

木谷は友達の

鈴木と平沼とで待ち合わせ場所に

時間の5分前についた。

「待った……？」

そこには疲れ果てた男子3人がいた。

「待ったとも。25分も待った」

田中が怒ったような口調でいった。

「って誰の意見で30分前にここって話だったんだよ？

太一、お前だろ？

ってしかも女子は浴衣じゃねえのかよ。

俺の浴衣女子と夏祭り計画が…」

藤原が残念そうにいった。

「浴衣ねえー。」

だってあれ暑いもん」

女子の平沼が答えた。

「じゃ、いこつか。山本君」

木谷が彼氏である山本を誘った。

「おう。」

じゃ、後は4人で楽しめや。

また9時に合流しようや」

そうして山本は木谷と夏祭りに行った。

「じゃ、僕たちも行こつか」

田中がそういった。

そうして4人は夏祭りへいった。

（確かに鈴木さんは可愛いな）

藤原は内心そう思っていた。

「なー鈴木さん。」

俺とまわらへん？」

「え、でも…。」

静香は？」

「ほら、太一とメガネ同士いい雰囲気や。

邪魔すんのもなんやし、

回ろつや」

「…。」

うん、じゃ…」

そうして藤原は鈴木とまわっていた。

「あ、あたし焼きそば食べたい」

「そっか。じゃ、並ぼっか」

「うん」

「あーでも俺も並ぶけど買わんとくわ。

多分9時なつたら俺と鉄平で

花火買いに行く予定やねん。

その金なくなつたら困るから」

「マジで？」

花火すんの？

楽しみー♪」

ズルズルー。

ズルズルー。

…。

「あたしこれ以上食べれない…。
藤原君いる？」

「あ、そうなん？

じゃ、貰うわ」

ズルズルズ…。

（つてうおーい。

鈴木さんと間接キスやないかーい。

なんか鈴木さんのこと気にいった。

いつそ告ってみっか）

「あー鈴木さん」

「何？」

せっかく告白しようとした藤原の
意思は誰かの叫び声で消えた。

「た…助けて！！！！」

声の主は山本とまわってるはずの
木谷だった。

「どしたの？胡桃ちゃん」

「なんや、どないしたん。木谷さん？」

「山本君がウチのこと襲おうとしてん…」

「マジでか？」

「とりあえずあたしらといとき」

「男の人が近くににいるのは嫌。」

また襲われたらどうしよって考えちゃう…」

「ごめん、藤原君。」

一人でまわつといてくれる？

9時になったらみんなとの

合流地点いくから」

「お、おう」

…。

ホンマにやりおった。

鉄平の奴。

アホや。

探さないけん。

…。

「おい、鉄平」

「ん、なんや？大樹。」

それより胡桃知らん？」

「知つとるわ、ボケ」

「なんでお前にボケ扱いされなあかんねん」

「お前、木谷さんに何した？」

「いやーキスしようとして

肩つかんだ時にこの雰囲気やったら

いけるんちゃうかと思って

押し倒したら逃げられた」

「逃げられたねえ。

何でやとおもう？」

「なんでやるな？」

彼氏の俺がやろうとしたのに

逃げるって」

バシーン。

山本の頬に藤原のビンタがとんだ。

「逃げたんはなあ、嫌やからに決まっとるやないか。

相手の気持ち考えや。

そんなんやったらなあ、彼氏失格や、

ボケ」

「なんやと？」

「なんべんでもいうたる。

彼氏：いや人間失格や」

「どうとでもいっとけや、

彼女いたことない人間が」

「おまえなあ……」

「もういい、お前といたら

虫酸が走る」

そういつて山本は去った。

祭りの日の9時。

とりあえずは6人揃った。

まったく山本と木谷の間にあったことを

知らない田中と平沼の2人以外は

険悪な空気だった。

「あーもう今日は解散にしょーぜ。

なあ、胡桃」

「…」

「鉄平、お前。

木谷さんに謝る気はないんか？」

「ねえよ。

自分の彼女や。

どう扱おうが自由やろ」

「最低！」

バシーン。

今度は山本の頬に鈴木の本タが走った。

事情を知らない田中と平沼はただみてるだけだった。
そこで田中がいった。

「山本君が解散って言ったから

もう帰ってもいいかな？」

「あー太一は今の話の事情わかるか？」

「さっぱり」

「じゃ、帰っていいぞ」

「バイバイ。

まー僕から4人に言えるのは

仲良くしときや」

そういつて田中は去った。

そして一緒にまわっていた

平沼も一緒に去っていった。

「鉄平、

お前自分が何したか言うてみ」

「ああ？

だから胡桃に…」

「もうウチのこと胡桃って呼ばんとって」

「はあ？胡桃までな…」

藤原が山本の両頬を片手でつかんだ。

「木谷さんがもうそう呼ぶな言うてんねや。
お前にそう呼ぶ資格はもうない」

「へーへー。わかりましたよ。
木谷にキスしようとして肩つかんだ時に
この雰囲気やったらいけると思って
押し倒したら逃げられた」

「さっきも言うたけどな、
逃げるってことは嫌やねんで。
それに謝る気は？」

「なんべんも言わすなや。
ないわ。」

自分の彼女どう扱おうが
俺の自由やる」

「ボケ。
俺は彼女いたことないから
ようわからんけどな木谷さんも人や。
心はある。」

それを考えたれや。
自分の彼女やったら何してもええんちゃう。
彼女は物ちゃう。
人や。」

お前の考え方は間違えとる」
「モテへんお前に言われとうない。
く…木谷は俺のもんや。
俺の女や」

「山本君…。
もうウチら彼氏と彼女の関係やめよ」
「はあ？何言うとんねん」

「別れよ」

「俺は嫌じゃ。」

く…木谷が好きや」

「そう。」

さっきの山本君の考え方聞いてて

もうこの人はダメだなって思ったの。

もう付き合ってられないの」

「そんな……」

「鉄平、これがお前のしたことへの罰や」

夏祭りはこれで解散した。

夏期講習が始まった。

藤原と山本の関係は陰悪だった。

運悪く講習での席は

二人横同士だった。

「おい、お前のせいで俺の人生計画台無しや。

どないしてくれんねん」

「…」

「無視すんなや。藤原」

「うるさい。」

祭りの時に言っただはずや。

木谷さんと別れるのが

お前が木谷さんを押し倒した罰や」

「知るか」

講習4日目終了。

藤原は帰ろうとした。

門の近くで鈴木と木谷が待っていた。

「おー。」

鈴木さんに木谷さん。

どないしたん？」

「藤原君にお礼したくて…」

木谷が答えた。

「お礼って俺なんもしてへんで」

「祭りの時、ウチのこと」

山本君からまもってくれてありがと」

「ええよ、別に」

「あ、これから友達でいたいから」

アドレス教えてくれへん？」

「全然ええで」

それから一年。

藤原らは高3である。

藤原と山本の関係は相変わらず険悪。

ブーブー。

藤原のもとに一通のメールが来た。

木谷からだ。

「よかつたら今年も祭り一緒にいかへん？」

「いいけど。」

去年のはトラウマになってへんのか？」

「あれはあいつの考え方。」

もう大丈夫」

「で、誰と行く？」

「またあの5人で」

「山本抜いたメンバーやな？」

「うん」

「わかった」

夏祭り。

今年は男子も女子も同じような時間についた。

しかし鈴木はいなかった。
聞いた話、勉強したいそうだ。

今回は前回のようないことが起こらないように
4人一緒に行動した。

そして9時。

今回は花火をした。

そのときだった。

「ねえ藤原君。

好き？」

「何が？」

「ウチのこと」

「まー嫌いか好きなら好きやな」

「じゃ、付き合ってくれへん？」

木谷は顔真っ赤であった。

「え…」

「あのね、正直ね。

あの去年の祭りでかばってくれたり

守ってくれたりしてね。

すごく嬉しくてね。

あれから好きなの。

付き合って、お願い」

「ま、ええけどさ。

俺あんまし女の子の扱い方わからんで」

「それでもいいの。

ありがと」

（後書き）

なんか短編小説なのに
えらい長くてすいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0546n/>

夏祭り

2010年10月10日17時48分発行